

慶長遣欧使節団をアステカ人歴史家の 日記に見る、その経緯

THE KEICHO DELEGATION TO EUROPE AND ITS FATE AS SEEN IN THE DIARY OF AN AZTEC HISTORIAN

Peter PANTZER*

The vicissitudes encountered by the delegation to Europe, sent by Date Masamune, delegation that visited the court of the King of Spain and the Pope in Rome, became widely known through Endo Shusaku's novel, *Samurai*. The delegation, led by Hasekura Tsunenaga left the port of Tsukinoura and started crossing the Pacific in 1613 (18th year of Keicho period). After seven years, in 1620 (6th year of Genna), Hasekura and the other members returned to their home in Sendai. Hasekura visited Portugal, Spain, Rome, was christened in Madrid, crossed Mexico twice and in Philippine waters escaped the attack of the enemy fleet of the Dutch.

In Japanese history, these events, described by Endo Shusaku with a unique vividness, have been the target of an exhaustive research. My intention would be to point to facts not yet known, I believe, in Japan.

I introduce a record of the delegation's stay in Mexico (1614 or Keicho 19)

*ペーター・パンツァー ウィーン大学（オーストリア）にて博士号取得。1968年より1971年、東京大学に留学。現在ボン大学（ドイツ）日本文化研究所教授。日本語訳された著作に「日本オーストリア関係史」（1984年、創造社）、「ウィーンの日」（1990年、サイマル出版会）などがある。

written by an eye witness, a member of the Aztec aristocracy. The appearance of the Japanese and the purpose of their trip are described in detail. This diary also offers a good image on the relationship between Japan and Mexico. Its author, a learned Indian, named Chimalpahin (1579–1660?), aimed to be the historian of the Mexican people before the Spain occupation. The documents he left behind, handwritten in the Aztec language, use the Latin alphabet and are, at the moment, being translated and edited by a joint team of scholars from the Institute for Japanese Studies and from the Institute of Ethnology of Bonn University. Had Endo Shusaku have known of the existence of these writings, he would have surely introduced in his famous novel the meeting between the Japanese delegation and an Indian scholar.

日本文学の中で最初に読もうと手にしたのは源氏物語でした。でも正直に申しますと、初めの20ページ位からはまるで泥沼に足を取られてしまったようになってしまって、その先へは進めなくなってしまったのです。廷臣達、女官達、役人達の織り成す複雑な人間模様に行き詰まってしまったのでした。

それで次に手にしたのは何だったか、今でははっきり思い出せませんが、多分『方丈記』だったか、或は安部公房の『砂の女』だったかと思います。この2冊はちゃんと終わりまで、読了したことは確かです。『砂の女』の甲虫の新種発見によって、無味乾燥、灰色っぽい大学の研究生活に花を添えようと夢見ていたらしい昆虫学者、彼と光源氏とは全く違うタイプの男性でした。

遠藤周作という作家の作品に私は特に共感を持っています。その理由は、彼がキリスト教を基幹に持つ西洋的なものについて体験し、理解を持って、日本文化との拘りを巧みに表現していること、また歴史的次元の重要性の認識による作品群、そして彼の人柄の豊かさをあらかず洒脱な作品の数々によってです。歴史は決して過去のものではなく、現在にも脈々と生き続けているものなので

す。このことは、第二次世界大戦で捕虜となったアメリカ空軍兵たちの扱い方（『海と毒薬』のことです）や、江戸時代初期の支倉常長の欧州訪問使節団の捉え方でわかります。遠藤周作は興味を唆り、鮮やかかつ悲劇的な日本史の中の出来事を、1980年に出版された小説『侍』において実に見事に書き上げて、大成功を齎しています。

勿論、彼が書くのは文学ですから、普通の歴史学者たちの見方とは違う所にスポットを当てて書いています。彼にとっての歴史の流れとは、人間の感情という主役に対する舞台の背景、舞台装置のようなものでしょう。『侍』で彼が書いていることは、歴史上の事実に沿ったものではありませんけれど、真実なのです。歴史を専門としている私には、資料に手を加えず、そのままを伝える義務がありますから文学者のような自由があるわけではありませんが、別の意味で興味の尽きることはありません。

さて、西洋との交流が始まって間もない頃の日本、遙か彼方の外国文化とのたくさんの出会いがあった17世紀という時代、その当時のメキシコとのかかわりをこれから一緒に覗いて見ましょう。

私の間違いでなければ、今日ご紹介致しますこの資料は皆様方には多分初めてのものではないかと思えます。印刷物やエレクトロニクス・データで資料が山ほどある時代ですから、或はどこかで発表されているかもしれませんが、私としては日本研究で、アステカ人歴史家が記したアステカ語の文章が紹介され、研究に利用されたという事実をまだつかんでおりません。これはインディオの歴史家が日本人について記している文章です。これによりますと、メキシコの原住民がこの国を回った支倉使節団に出会っているのです。

では、それほど貴重な文書が一体何故もっと早く我々の目に止まらなかったのでしょうか？ その解明をする前に、ここで少しテーマからそれて、ドイツ・オーストリアの諸大学における日本研究の現状、又は研究方法についてお話ししたいと思います。こちらでは日本学の専攻といってもただそれだけを学ぶ訳では

なく、修士の学位を取る為には学生は主要学科と副学科の2科目を専攻しなければならないのです。それは人文科学系の他のいろいろの分野から専攻を決めるわけです。そして学位論文は主要科目のテーマによって書きます。副学科に費やすエネルギーは、主要専攻学科のおよそ30%~40%になりますから、面倒で厄介なことに思えるかもしれませんが、そうとばかりも言えないのです。日本学のような地域学科では、その言語と文化関係において幅広く興味深いことをいろいろ学べます。しかし、研究の完璧を期す為にはどのような方法をとればよいでしょうか？ 百年ほど前にこちらの諸大学で日本学という学問が誕生した当時、それは文学の分野だけでした。ですから研究手段も文学的なこと、印刷された書物を活用する以外には方法もあまりありませんでした。しかし、時は移り、世界の距離がどんどん縮まって、学生達も一年目で早くも日本に行くことが出来るようになった今日このごろでは、文学に加えて、日本の経済、政治、社会など、多方面にも目が向けられるようになりました。しかしこうした分野を扱うのに、経済学、政治学、社会学などの知識がなくてどうして専門研究ができるのでしょうか？ やはり各分野である程度の専門知識が必要となってきます。こういうお話をいたしますのはこのようなシステムが大学の教師たちにも実りを齎し、諸学科協力の精神、態勢を生むことになったからです。修士論文の評価にあたっては他の学科との接触が活発になります。

さて、ここで話を先のアステカ語（メキシコ原住民の言語）の資料に戻します。それは当研究所のある学生が日本学と民族学を併せて専攻していたことから始まります。話し合いをいろいろ重ねて行くうち、私がこのテーマに関心を寄せた事を同僚はとても喜びました。メキシコ原住民の言語を専攻する研究者はなかなかおりません。こうして互いに協力関係が生まれ、一方が翻訳を担当し、他方、私が日本関係のことを担当をすることになったのでした。

お話ししたこの17世紀にアステカ語で書かれた歴史書の中に、日本に関しての詳しい記述が初めて登場するのは、1597年のある出来事についてです。それはその年の2月、豊臣秀吉の命令によってキリスト教徒に対して最初の処刑が

行われたことについてでした。「26人の殉教者たち」と後に呼ばれるようになった人達の事です。

このニュースがメキシコに伝わったのはだいぶ経ってからのことで、正確には10か月後でした。メキシコ原住民の歴史家はこのことについてこう記しています。

「1597年、12月7日の日曜日、待降節第二日曜日、フワン・デ・カステイヨ修道士より中国（チャイナ）付近の国でカトリック僧たち、殉教の告知あり。

聖フランシスコ修道会の6人の跣足修道僧たちである。十字架に磔の刑であった。

日本という場所で磔にされた。その他にもその町の信者たち数名殉死。皆が命を落とした。皆一緒に殺されたのだ。かの地、日本の君主の命令によるものであった。」

長崎と言う地名はここには出てきません。著者が知らなかったのか、又はあまり重要ではないと思ったのか、でしょう。この長崎の殉教者たちの遺骸がメキシコに到着したという歴史的事実の方が、この著者には重要だったと思われます。メキシコには聖フランシスコ修道会があるのでそこに葬られる為に送られて来たのです。遺骸は処刑後、丸一年経ってメキシコに届いたのでした。

「日曜日、1598年の12月6日、午後に中国（チャイナ）の隣の日本で亡くなった跣足修道僧たちの遺骨が到着。

棺に納められ当地に運ばれた。

メキシコ在住の僧たちが全員これを迎えに行った。」

この記録の先を読む前に、まず、その記録の著者の身元について調べてみた

いと思います。彼は、日本ではまだ織田信長が采配をふるっていた時代、1579年5月26日、メキシコ・シティーから30キロ程離れた Tzacualtitlan Tenanco Amaquemecan Chalco で生まれています。名前はドミンゴ・フランシスコ・デ・サン・アントン・チマルパヒン・クアウトレファニヰンと言う長いものでした。これからは省略してチマルパヒンと呼ぶことに致します。彼の両親の正式名も分かっています。その先祖についてもたいへん詳しく書き残されていますから、この記録が事実でないとは考えられません。彼はチャルカというインディオの酋長の家柄の出で、一族の家系図は12世紀中頃まで、十代以上も遡ることが出来ます。このチマルパヒンの先祖には、1418年に死んだザクアルティランの酋長イズトロヰンの息子で、チマルパヒンとクアウトレファニヰンという兄弟がいました。兄が支配権を放棄した為、弟が1418年から1465年まで酋長として政治を司っていました。日本では足利家の六代將軍義教が実権を握っていた頃の事です。この記録の著者は、この立派な兄弟からインディオの名前を受け継いだのです。チマルパヒンとは「早く走る盾」クアウトレファニヰンは「舞上がる鷺」と言う意味です。このあたりから彼の家族がスペインの植民地時代にあっても、昔ながらのアステカの伝統を大切に守り重んじていたことが窺えます。この伝統を重んじる姿勢が彼に自分の民族の歴史を記述し、残すことを促した原因となったのは確かです。

チマルパヒンが生まれた頃は、アステカ帝国はスペイン人によって既に破壊されていました。その50年程前にメキシコはスペインの植民地になっていたのです。こうした外からの政治的・文化的侵入による変革から両親共々チマルパヒンも洗礼を受けてカトリック信者となっていました。彼の長い名前の中のドミンゴとフランシスコは彼のクリスチャン・ネームなのです。それでも彼はインディオの血を受け継いでいることを決して忘れず、そのことを常に誇りに感じていました。それ故、スペインに占領される以前のインディオの歴史を書き残しておくことは彼にとって非常に重要なことで、使命と感じていたのです。

14歳の時、チマルパヒンは教会の仕事に携わるようになりました。ここにあ

る資料では明らかでない部分もありますが、その後長い間この事に従事していたようで、メキシコ・シティーにある教会、聖アントニオ・アバドで多分、管理者のような職にあったのではないかと考えられます。彼の「デ・サン・アントニオ」というのは、スペイン語での苗字と解します。つまり、彼は当時のスペイン社会の一員となっていたのです。教会は非スペイン人にも教育を施し、社会的な出世を援助したりというような役割も果していました。由緒ある家柄の出であるという事も過去の夢でしかなくなりましたが、教会の仕事では時間もある程度自由になり、まともな暮らしも保証されていたようです。そうでなければ歴史記述などに集中してはいただけなかったでしょう。

チマルパヒンが30歳の頃、日本ではまだ家康も生きていて、秀忠が二代目の将軍でしたが、彼はインディオの歴史学者になり、同胞の過去に関する年代記作者になろうという決心が固まったようです。日本研究にとって格別貴重と思われるのは、きちんと年代順に整理されて記述されている彼の日記です。そして日本人が初めてメキシコを訪問したのもちょうどその頃のことだったのです。

それは、1610年7月（慶長15年）日本を出港したその船内にはフィリピンのスペイン総督、ロドリゴ・デ・ヴィヴェロ、それに日本人たちも乗船していました。この総督はその前年、日本海域で遭難し、将軍秀忠に保護されていたが、この船でメキシコに戻るようになったのです。

チマルパヒンの日記を続けますと、

「本日、1610年12月16日、木曜日の暁6時に一行がメキシコ・シティーの中心に到着。

日本男子が19名程。

……

彼らは、両国が戦うことのないよう、キリスト教徒たちと和平を結びにやって来たのである。

永遠に平和が続くよう、互いに友好関係を保ち、スペイン商人たちが日

本に入国出来るよう。

これからは日本でも外国人が捕らえられるようなことがあってはならない。同様に、日本人もメキシコへ来て商売をしてもよい。当地に来て日本産の商品を売ってもよいのだ。

そして、当地でも日本人が捕らえられるようなことはない。……」

それから日本人たちの容姿恰好についてかなり詳しい説明が続きます。中でも次の文が注目されます。

「腰のあたりにベルトを締め、そこに金属製のカタナを差している。
カタナは二本である。……」

チマルバヒンはこの武器に対して「カタナ」という日本語を使っていますが、その後スペイン語でも「ガタナ」という発音で通用するようになりました。

更に日本人たちの描写が続きます、

「彼らは物静かでもなく、謙遜な人柄でもなく、手ごわそうに見える。
頭は奇麗に剃ってぴかぴかである。脳天の中程までぴかぴかに剃り上げ
ている。

こめかみの辺りから髪を生やし、後ろで束ねている。

……

このような髪のまとめ方は娘のような風采に見える。

しかし、彼らの髪の毛は後頭部よりも長く piochtli のように、髪を振って巻き、束ねて結んでいる。」

piochtli というのは、メキシコのオトミ・インディオの子供たちがしていた髪形のことです。

「皆恐ろしく青白い。顔がとても清潔で真っ白だからだ。

ここの日本人は皆そうだ。皆このような外見だ。

また、彼らはあまり大きくない。

皆がこういう風に日本人を見た。」

支倉常長一行は、チマルパヒンが見た最初の日本人ではありませんでしたが、彼が会った中では最も有名な日本人だったと言えるでしょう。伊達政宗が派遣したこの使節団については、皆様もご存じのことですから、その背景などは省略、遠藤周作の小説に取り上げられたのもこの使節団ですから。

小説の中から一部を引用して、アカプルコの港からメキシコ国内へ向かったこの使節団の足取りを少したどってみましょう。

「初めて見るノベスパニヤの風景は、まぶしく、厚く、白かった。遠くに塩をまき散らしたように花崗岩が点在する山が続き、眼前には巨大なサボテンのはえたひろい荒野が広がっていた。泥をこね、木の葉と枝とで屋根をふいたあわれな農家が見えた。原住民のインディオの家である。裸にちかい少年が行列を見ると急いで家にかくれた。その少年が連れていた数頭の黒い毛の長い獣に日本人たちは驚いた。彼らはこんな動物もサボテンも知らなかった。

花崗岩の山が続く。陽差しはいつまでも強い。

十日目の昼ちかく、村が見えた。山の斜面に米をまいたように漆喰づくりの家々が散らばり、真中には教会の尖塔が突き出ている。「あの村は」とベラスコが馬上から指した。「神の御心にかなう村でございます」

「私たちは」ベラスコは日本人たちの方に向きを変えた。すると彼の腋の下から甘ずっぱい強い臭気が漂ったが、ベラスコはそれに気づかなかった。「このような神の村をノベスパニヤにあまた作りました。切支丹にな

ったインディオたちは皆、倅せでありますよう」

チマルパヒンの文章の中には、キリスト教に入信したことを幸いと思っているかどうかを伝えるものはありません。しかし、支倉使節団の細かな記録を残してくれたのは幸いでした。

チマルパヒンによれば、まずは先発隊だけがメキシコ・シティーに到着したそうです。

「本日、もう一組の日本人たちがメキシコ・シティーに到着。12時、正午きっかりに彼らは馬に乗って市内に入場。

「歩いて続く従者たちも連れていた。家来たちは肩に黒い棒状の物をかついでいたが、多分槍であろう。

……

日本人たちの身支度や服装は次ぎのようであった。このようにかの地の故郷でも暮らしているのだ。

纏った衣服は腰のところでベルトをしめるようになっている。髪の毛は後頭部で束ねて結んでいる。

百人の従者たちがやって来た。金属製の道具などをたくさん持って来ている。それに書見台や布地など、ここで売ろうと思っている品々。

我らの親愛なる神父様のひとり、跣足フランシスコ会の神父様が通訳としてやって来た。」

遠藤周作の作品で描かれる支倉は、藩の重臣たちから試験的に外国へ送られる、田舎のあまり身分も高くない侍となっています。しかし、チマルパヒンは彼のことを日本王国の大使と呼んでいるばかりか、日本の皇帝に仕える大臣と

いう風に扱っています。もっとも彼らの言う皇帝とは、將軍を指していたのだろうと思いますが。

「本日、1614年3月24日、日本王国の大使がメキシコ・シティーの中心に到着。大使は聖フランシスコ教会近くの家に宿をとった。

メキシコでは、君主である日本の皇帝が彼を使節として当地に遣わした、というように聞いていた。

彼は法王パウロ5世にお目通りし、カトリック教会に敬意を表する為、ローマへ向かう。日本人たちはクリスチャンになりたいのだ。皆洗礼を受けたいのだ。母なるローマ教会の子供となる為に……

大使はメキシコ副王訪問の為、短期間当地に滞在。その後、和平を約束する為我らの大君主である、スペイン王フェリペ3世に謁見することになっている……。

彼らの君主である日本の皇帝より、永遠の平和と友好を得よう命じられたからである。皇帝の為、大使はスペイン王のもとに赴き、今後、両国が戦争に入る事のないよう、友好関係が永続するよう、日本人もメキシコへ来られるよう、メキシコで商売が出来るよう条約を結ぶのである。

そしてスペイン王の謁見を済ませると、大使はローマへ向かい、法王の謁見を賜るのだ……

日記からの引用がだいぶ長くなりました。日記は更に詳しく続くのですが、ここでこの日記そのものについては、少しお話ししておきたいと思います。日記とはなっていますが、実は年代記と言った方がよいのかもしれませんが。チマルバヒンはかなり長い期間に亙ってこれを書いていました。追加文が文頭についていたり、終わりについていたりして、余白もメモで一杯になってしまい、時には重

複もあったりして、出版の為にはまとまりがつかなくなってしまうようです。つまり、その原稿は印刷用にすっかり吟味されたものではなかったのです。後に原稿は二つに分けられて、少ない方の原稿はメキシコに残され、多い方は248ページありましたが、パリの国立図書館に収められました。支倉常長と他の日本人たちの記録を辿ることが出来る部分はこちらの方に入っています。あるドイツのアステカ研究学者が1960年にハンブルグでこの手書きの読みにくい文書を解読してアステカ語で出版しました。残る仕事はその翻訳だけということで、これは目下、ボン大学で進行中です。

さて、まだ疑問がお有りの事と思います。それは、つまり、このアステカの知識人チマルパヒンは一体何語でこれを書いたのだろうかということです。アステカ人は昔から象形文字を使っていました。チマルパヒンも象形文字の書類が読めたに違いありません。酋長としての彼の家にも絵文字のテキストが所蔵されていたことは確かです。しかし彼の時代はアステカ帝国はスペインの植民地とされており、文化は衰退の途にあったのですから、こうした象形文字は殆ど使用されなくなっていました。彼はアステカ語の文章を、スペイン人がメキシコに持ち込んだラテン文字を使って書いていたのです。もし彼がその当時、象形文字を使用していたら、丁髷姿の支倉や他の日本人たちをどのように描写したでしょうか？と、考えます。

チマルパヒンの記録から、もう一か所ご紹介したいと思います。

「本日、1614年5月29日、聖なる秘跡の日、日本王国の大使一行は当地を出発……旅路を続ける前、彼は一緒に来た人達を分けて、一部は従者と
して連れて行き、一部は商いをさせる為に当地に残して行った。……」

これが支倉一行に関する、最後の記述です。ヨーロッパから日本への帰途、メキシコに寄ったことについては全く記されていません。それは1615年でこの日記が終わっているからで、書き続けられたのかもしれませんが、記録として

残っていないのは残念ですが、歴史資料として以上のことは大変興味深いものです。

これらはアステカ貴族チマルパヒンがスペイン人の為にはなく、自分の民族であるアステカ人の為に残したもので、彼の文章からは強い使命感、情熱に燃えて書いたということが伝わってきます。手書きのラテン文字も整って美しく、アステカ語の言い回しも明瞭で表現が豊です。同僚がこれを翻訳、編集していることは私にとって大変嬉しいことです。

それにしても、遠藤周作は作品中、なぜ支倉とチマルパヒンとの出会いについて一言も触れていないのでしょうか？ 小説の終わりに、支倉が既に日本の故郷に戻って来たところで次ぎのような箇所があります。

「皆が寝しずまった囲炉裏のそばで旅から持ちかえった文箱をあけた。幾度も海の水をかぶり、ノベスパニヤの暑い陽にさらされた文箱である。石田様の仰せに従って、切支丹の匂いのする物いっさいを焼き棄てねばならぬ。文箱のなかには、行く先々の修道院で、神父や修道士が思い出に自分^{パードレ}の名や旅の安全を祈る言葉を書いてくれた紙や、彼らが祈祷書に入れる小さな聖画が入っている。そんな詰まらぬものでも帰国すれば女や子供たちが驚き悦ぶと思って、棄てもせずにとっておいたのだ。

侍はそれらの紙と絵とを破り、囲炉裏の灰に投じた。御評定所がこの紙や絵までも疑い、手掛かりにするかもしれぬからである。それらの縁がめくれあがり、栗色に変わり、やがて小さな炎が動いて消えた。」

と、書かれています。

カトリック信者のインディオ、チマルパヒンが託した思い出の品々も、願っても支倉家の囲炉裏で、すっかり燃えてしまったのでしょうか。それで遠藤周作はこれを読む機会を逸してしまったのでしょうか。ね。